空間・社会・地理思想 14 号，103-123 頁，2011 年
Space, Society and Geographical Thought

ラカンと地理学
－空間の生産再考－

デレク・グレゴリー *
（大城　直樹 ** 訳）

Derek Gregory
Lacan and geography: *the production of space* revisited in Benko, G.& Strohmayer, U.(eds), *Space and Social Theory: Interpreting Modernity and Postmodernity*, Blackwell, 1999,pp.203-231.

「侵入したあと、鏡の奥で鳴る騒々しい武器の音を耳にすることになるだろう」
ホルヘ・ルイス・ボルヘス『幻獣辞典』

パリ幻想

想像してみよう。一人の老いた哲学者がランビュトー通りにある自宅アパルトマンから窓外の様子を伺っているのを。現実界は律動的なもののなかにあると彼は確信している。〔彼は〕窓際に立って、大都市の騒音や轟音を材料に、街路の諸々のリズムを重ね合わせ、交互に入れ替え、解釈し始める。彼は群集の増減や、金属的であり肉体的でもある身体の動きを演出する，資本の広大な見えざる回路を感じ取ることができる。それはこの光景の中のどこであっても、どこからか、彼が実感するところでは国やフランス銀行の複雑な規律から、もたらされる秩序なのである。だが、都市生活にはそれ以上のものが存在する。街路を見下ろすと、窓や扉、ビストロや店舗のファサードが、舗道を活気付ける身振りや人影との微妙な調和のうちにたたずんでいるように見える。それなのに今では，通りの向こう側に，異質で押し付けがましい，金属製の結合された配管の巨大な陳列物が，この人間的スケールを超越し，注視されるべき迷宮のようにおのれを曝している。あたかも絶対的なテクノクラシーによって支配される惑星から落下してきた隕石かのように。彼の暮らす小さな近隣地区での日常生活の組織 fabric は，この巨大で超 supra モダンなボブールのブティック〔施設〕であるジョルジュ・ポンピドー・センター，この抽象化されたモダニティの容赦ないリズムを直ちに分節化し接合する記念碑的空間によって損われてしまったのである。周囲の広場での娯楽――火を喰う奇術師，手品師，蛇つかい――は，他の手段によってその平凡さが引き伸ばされていくルーティン化した日常世界に対して，イリュージョンのような小休止しか提供しない。だが老哲学者は，＜現実なるもの＞の音を，消された呟きを，また，より旧く幾分よりオーセンティックな日常生活の痕跡を，都市の音楽に，またイメージのつらなりによっては把握されることのできないリズムに，自身を開くことによって，まだ聴き取ることができることを確信していた。

想像してみよう。ボブールでは，芸術作品の上演でもある芸術作品が，もう一人のフランス人哲学者が携わって，新しいインスタレーションと接合する形で企画されている。ボブール〔訳注：ポンピドー・センターのこと〕は内側が外側へと転回された建築物であり，緑色のパイプや青色の導管がその外観に張り巡らされ，ガラスのチューブが内側へと斜め切り状に入り込む棚のような構築物に覆われた建物である。しかし，それはすぐさま反転され内側が外側となる。巨大な金属的迷宮が配置され，灰色のガーゼ状のスクリーンによって分割され，反転された美術館を形成しているのである。その迷路のなかを彷徨うことで，「遊歩者 flaneurs ＝器用人 bricolours」らは未来についての暗示〔通告〕を過剰供給される。これらは彼らの周りにあるものすべてではあるが，固定することも命名することも地図化することも出来ない。言い換えるならば，それに対して訴えることのできる事物の秩序が存在せず，読解を導く何らのメタ＝物語も存在しないのである。観賞者などもはや存在しない。彼らはポストモダンなるもののドラマの中での演者として溶解させられている。これらのパフォーマンスは鏡面仕立ての入口である「非＝身体の劇場」から始まり，脱身体化した一群の声――バルト，ボードリヤール，デリダ，またアルトー，ベケット，クライスト――のなかで進展する。これらの声はオブジェ，ヴィデオ，スライド，ディスプレイによって生気を与えら

＊　ブリティッシュ・コロンビア大学
＊＊　神戸大学人文学研究科

れる。すなわちこれはこの哲学者が「非物質的なものLes immateriaux」と呼ぶものへのひとつの技術・科学的な冒険なのである。他の美術館とは異なり，ここはかつて行なわれたものの体系化 codification を展示するのではなく，存在するであろうものに対する方向感覚を失った予期を展示するのである。この風変わりなポストモダンの美術館において，哲学者は，従来「現実的なもの」とされてきたものの凍結した表層を破砕し，自明的世界のどんな細事――具体としてある自己を含む――もプロセスと関係の網目（「非物質なもの」）のなかで無限に分析され得ることを示して見せようとした。彼の目的は，複合的世界のポストモダンなヘテロトピアと多様なアイデンティティにそぐう存在のために，単一世界の伝統的なユートピアに対峙し，人間の身体の明け渡しと空間の脱物質化を通して成立する圧倒的な sublime 移ろいやすさを暴き出すことにあった。

私の空想における老哲学者はアンリ・ルフェーヴルであり，若い哲学者はジャン＝フランソワ・リオタールである。しかしこれは単なる部分的な空想に過ぎない。1980 年代初頭, ルフェーヴルはボブールを見下ろす彼のアパルトマンから聴くことのできるリズムについて熟考する興味深いエッセーを書いており，1985 年には，リオタールは「非物質的なもの Les immateriaux」展を監修している[1)]。ルフェーヴルがリオタールのインスタレーションを観たかどうか私は知らない。もし観なかったとしても，彼はきっと恐怖の部屋と見なしたことだろう。また彼の確固たるヒューマニズムはけしてリオタールの「非人間的なもの」への魅了に同意することは出来なかった。しかし，この二人を想像的に並置することは，ルフェーヴルを「先駆的な」ポストモダンの哲学者として扱う試みを邪魔する安上がりの方法であり，またより重要なことには，ルフェーヴルがポストモダンなものに対する最も影響力のある見通し visions の一つとして，特に生産的な場として、身体と空間の関係を同定するのを妨げることになる。以下では，第三の登場人物であるジャック・ラカンによる概念格子 grille を通じてルフェーヴルを読むことによって，この場を「再」構築してみようと思う。これは特段奇異なことではない。実際, ルフェーヴルはその「リズム分析」によって精神分析に取って代わろうと目論んでいたのだし，空間の生産に関するこの尊大 magisterial な説明が，部分的には同時代のラカンに対する批判に依拠していることを示してみようと思う。

身体と空間の歴史

ルフェーヴルの著作は，（私にとって）空間の生産に対する批判的理解を発展させるための最も重要な情報源のひとつである。その生涯のうち，彼はおよそ 70 冊にもなる書籍を執筆した。が，「都市問題」と呼ばれることになる問題については，1968 年から 74 年にかけて，より直接的な形で言及されることになった。『空間の生産』は最初，ルフェーヴル７０歳代の初期に出版された。それは，想像的で，痛烈で，大いに示唆的であったという点で彼の力の高みの極まりを示すものであった[2)]。そこでルフェーヴルは二つの相互に重なり合った「空間の歴史」を素描した。それはまた「身体の歴史」でもある。

最も重要なのは, 身体と空間の関係の歴史である。それはマルクスによる「政治経済学」批判の尖鋭化を通じて築き上げられた。多くの評論家はルフェーヴルの知的地勢図を，マルクス主義と折衷的人間主義の間に引かれた直線上にプロットすることで固定しようとする。私はそれらの重要性を貶めようとは思わない。西欧マルクス主義のなかでのルフェーヴルの立ち位置は非凡なものであるが，とくに再構築された史的唯物論への彼の傾倒振りがそうさせているといえる。確かに, 史的唯物論の「再構築」を謳ったハーバーマスのコミュニケーション行為理論とルフェーヴルの空間の生産論との間には示唆的な（私は表面的だと思うのだが）並行関係が存在する。ハーバーマスは，システムによる生活世界の植民地化について語ったし，ルフェーヴルは抽象空間の生産による「日常生活」の空間の植民地化について語った。しかしハーバーマスはこのプロセスをモダニティのプロジェクトのゆがみと捉えていた。彼自身の研究はその改善を企てるものであり，彼の立論のスケッチと再構成の歴史は，合理化という超越的なプロセスの内的論理と回路的図式を暴き出そうと企図するものであった[3)]。対照的にルフェーヴルは，機能主義的理性の勝利が資本主義的モダニティのまさに核心に刻み込まれていることを，強く仄めかす。その押し付けと疎外化は単に純粋にめぐり合わせのものとか偶有的なものというわけではない。ルフェーヴルは，その進展が劇的なまでに異なった歴史主義を組み込むオルタナティヴな歴史を提示する。この視角から見ると，日常生活の植民地化は，「視覚化の論理」を通じて進行していく。そのなかでは完全に人間的な存在の空間性はほぼ完璧に消去されてしまう。残されたものすべては痕跡であり，別の抽象的な幾何学のなかにある見せ掛けの人文地理なのであ

る。ルフェーヴルが言っているように，仮に資本主義が権力，知，空間性の特定の布置構成であるなら，そのモダニティは脱身体化 decorporealized された空間になかに刻み込まれていることになる[4]。

ルフェーヴルが歴史的経過と空間の生産の様態の重ね合わせを描くことを考慮していたからと言って，彼の企図が，政治経済学に対するマルクスの批判の単純な拡大版であるというわけではない。彼はマルクスの著作から多くのものを学んだし，『経済学批判要綱』のなかにある素描には特に影響を受けている。しかしながら，史的唯物論の古典的なカテゴリーを超えていくために，ネオ資本主義のもとでの集合的な空間の生産に，充分に特徴的な何かが存在すると彼は信じていた。部分的にはこの理由から，ルフェーヴルの研究には，もうひとつの空間の歴史が存在するものと私は考える。それは人間の身体と空間の間の発達的関係――それを通じて人間存在が子供から大人になるとされるその経過の間を移動するこれらの位相――からもたらされるものである。またそれは斜線を引くこと，すなわちラカン派の精神分析に対するもっとも目に見えない形での批判を通じて構成されている。ルフェーヴルに関する先稿では，多くの評論家と同様，ラカンに対する彼の反応を取りあげなかった。だが，本を二度同じようには読むことが出来ないように，『空間の生産』の再読はこの精神分析的挑発の重要性を私に説得したのである。以下では，史的唯物論に対するルフェーヴルの改訂が如何なるものであり，また特にその空間性の概念の構築について，こうした不安定な土台の上に乗っかりながら説明しようと思う。

ルフェーヴルとラカン

多くの点で，この二つの企図の並行関係は人目を引かないものであった。一方でポパーは，精神分析と史的唯物論の両方を，科学の座を狙うもの，すなわち彼自身の改ざんの基準を細心の注意を払って回避するような命題をともなう「疑似科学」として酷評した[5]。他方現代フランス思想は，多くの場合，フロイトとマルクス，リビドー経済と政治経済を結びつけることに没頭していた。20 世紀初頭以来，フロイトの著作を更新された史的唯物論に適応させようとする，近年マーガレット・コーヘンが「ゴシック・マルクス主義」と呼ぶものの重要な伝統が存在するのである[6]。マーク・ポスターは，ルフェーヴルは真剣にフロイトを読んだおそらく最初のフランスの哲学者であるが，それは「1920 年代のシュルレアリスムに短期間関心を持っていたときだけだった」という[7]。確かにシュルレアリストは，フロイトの研究を持続的にまた構築的なかたちで引用したフランスで最初の集団である――ある作者は，シュルレアリストが「発見」するまで，フロイトはほとんど知られていなかったと仄めかした。このことがさらなるフロイトの需要に役立ったかどうかは議論の余地があるが――。また，精神分析とブルトンの「モダンな唯物論」の間にはあきらかなに重要な結びつきが存在している[8]。しかしシュルレアリスムへのルフェーヴルの（批判的）関心は，戦間期に失われたわけではない。（フランス共産党と袂を分かった）1958 年以後も，彼の著作には活き活きと現されているし，1968 年 5 月の余韻のなかで執筆された『空間の生産』において，彼は「シュルレアリスムはそれが 50 年前にやった以上にまったく別の形で現れたのだ」と認めている。またその理論的前提は，まだ実現されてないとはいえ，それにもかかわらず残されていたのだとも。「内的空間を解読し，主観的空間から身体の物的領域および外的世界へ，そしてそこから社会生活への移行の性質を解明すること」[9]。以下で示すように，このことは本質的にルフェーヴル自身の「空間論的知識体系論 spatial architectonics」の目的であった。

だが，精神分析へのルフェーヴルの関心はフロイトを支持することではなかったし，また『空間の生産』を通じて，彼はラカンによるフロイトの挑発的再読に対する小競合いを続けていたわけでもない。ルフェーヴルとラカンは正しく同時代人であった。ともに 1901 年に生まれている。ルフェーヴルと同様，ラカンはシュルレアリスム――多くの場合その影――のサークルに出入りしたし，コレージュ・ド・ソシオロジの設立者であるバタイユ，カイヨワ，レリスとの議論にも加わった。反体制派のシュルレアリスムのこのグループは，1937 年にラカンのパリのアパルトマンで結成されたのである。彼はシュルレアリスムの言語の強迫観念的作用に魅力を感じていた。デイヴィド・メイシーが言うように，シュルレアリスムは意味の生産――ラカンがのちに象徴的なものと呼ぶもの――の探求に関わっているし，またそういうことから，部分的には従来の主観性概念への異議申し立てでもあった[10]。シュルレアリストたちはまた革命的思想のためフランスで最初にヘーゲルを再利用しようとした連中でもある。ルフェーヴルのシュルレアリスムへの関心は，かく

して先に述べたようにフロイトだけでなく，ヘーゲル（そして彼を通じてマルクス）にも向けられることにもなった。ルフェーヴルのマルクス主義は単純にヘーゲル主義的なマルクス主義ではない。彼のものは断固として批判的なものであるが，ヘーゲルの痕跡は彼の著作を通じてぬぐいがたく現前しており，また特に空間の生産に関する説明において顕著である[11]。コレージュ・ド・ソシオロジはラカンをヘーゲルに導く役目を果たした。その考えが主観性の構成に関するラカン自身の論文を発展させるために極めて重要な刺激となったことが明らかとなっている。だが，ルフェーヴルもラカンも，彼らの世代の多くの人々と同様，コジェーヴによるヘーゲルの『現象学』の回復〔的解釈〕に深く影響を受けていた。メイシーは，1930 年代の反体制的パリの文化地理を作成するなら，きっと「コジェーヴの講義室がその中心に位置することになるだろう」と示唆する[12]。ルフェーヴルもラカンも確かにそこで異なった教えを学んだ。だが，彼らが最も決定的に異なっているのは，史的唯物論をめぐってのものである。ラカンの最初期の政治的共感は，左翼と言うより右翼に対してのものであった。その後マルクス主義に密接に関わっていくようになるが，それは，ルフェーヴルが激しく否認する公然たる構造主義的マルクス主義にであった。実際，1963 年に ENS に彼のゼミナールを移すよう招いたのは，構造主義的マルクス主義の第一の主導者であるルイ・アルチュセールであった。後にアルチュセールはイデオロギー論の構築の際にラカンの研究を利用した。それはルフェーヴルのヒューマニズム的傾向と相容れるものではなかった[13]。多くの評論家はラカンとも相容れないもの――どれほどアルチュセールが綿密に『資本論』を読もうとも，彼は同じく注意深い研究をラカンに対しては行なわなかった――と主張する[14]。しかしそれは 1966 年にラカンがサルトルに対してアルチュセールを支持することで終わりを告げた。同じ年，ルフェーヴルとサルトルはすでに知的 < 和解 > を果たしていた[15]。1968 年 5 月の出来事がパリの街路で起こったとき，ラカンとルフェーヴルは多かれ少なかれ同じ側にいたし，この問題については同じ傍観者としてあった。だがそれにもかかわらず彼らの立場は異なったものであった。両者は学生の騒乱の炎を扇動したかどで非難された。とはいえ，どちらもバリケードの学生に与することはなかった。だが，ルフェーヴルはさらに共感的であり，ナンテールの彼のクラスは若き革命派の多くの結集場所となっていた。その一方，ラカンは「主人 a Master」を切望する者を糾弾しつつヴァンセンヌの講義室から怒りながら出て行った[16]。

これらの伝記的つながりと親和性は重要である。だがルフェーヴルもラカンも細部にわたって彼らの間の概念的緊張を暴露することはなかった。この理由から，私はラカンによって（様々な時期に）行なわれた一連の主張――そこからルフェーヴルが『空間の生産』のなかで最も目立つかたちで異議を唱える――を要約する形で提示していくことにしたい。これらの簡潔な説明がラカンの研究の要約的説明ではない――ではありえない――ことがはっきりしていることを望みたい。要約など不条理である。これらはどれもラカンへの批判を成すものではない。だが，これらの思考についての私の説明 presentation をそれらの是認と混同してもらっても困る。ルフェーヴルをしてそうした声高な異議申し立てをせしめたこれらの諸点を際立たせることで，逆に，彼がさらに推し進めようとしたこれらの他の反対要求の，よりはっきりとした意味が明らかになるはずである。この論文における私の意図は，概説である。ルフェーヴルがその空間の歴史学を構築する，注目されていない基盤のひとつを位置づけることで，彼の業績に対するより活発な批判的認識が開始されるであろうことを，私は期待する。

ラカンの思索

ラカンは三つの「界 orders」――現実界, 想像界, 象徴界――を仮定した。それらはともに, マルコム・ボウイのいう「人間精神に特徴的な無秩序の動きが描かれる」複雑な位相空間を形づくっている。空間的メタファーはラカンの研究において段々と重要なものとなっていった。それはルフェーヴルを魅了しかつ困らせるものである。ラカンは結果的にこの位相空間を，仮にこの輪のどれか一つが切断されてしまうと鎖がバラバラになってしまうような仕方で二つの分離した鎖の輪が三つ目の輪によって結び合わされる複雑な形態をとるボロメオの鎖（ないしは結び目）として設定した[17]。

< 現実界 >

現実界はラカンの最も理解しにくい概念の一つである。またそれはルフェーヴルが最も根本的にラカンと意見を異にする一つの場となっていることも注目される。まず手始めに次のように言うことができるだろう。現実界とは，そのなかで子供が生まれ，それを通じて

子供がその存在を「諸部分－に分かれた－身体」――ラカンが巧妙にジェンダー化された言葉遊びで＜オムレツ人間 un homelette＞と呼ぶ，組織されておらず断片化された「諸原料」の組合せ――を経験する「解剖学的で『自然的 natural』秩序〔界〕」である。この本源的な位相は，引き続く発達段階に一致する他の二つの位相，＜想像界＞と＜象徴界＞を通じすぐに組織化される。だが，ここに解釈上の困難が存在する。エリザベス･グロスは, ラカン派の「現実」を,「欠乏の欠乏」によって示される「純粋な豊穣さないしは充溢」と考える。この読み方は，ルフェーヴルの意向に最も近いものであることが分かる。その一方，ボウイは，豊穣さが,「それによって＜人間である being human＞ことが規定されるような「象徴的なもの」,「想像的なもの」,「現実的なもの」の間の干渉によって, ひとつずつ」アプローチされるものと示唆する。この主張は，明らかにラカンの三つの界の位相学的表象と一致するものである。後者の見解で見られるように,＜現実界＞は，つねに＜想像界＞と＜象徴界＞を通して不成功裡に終わるその表象に抗い，緊張の力の場のなかに捕らえられる，いわば永遠に「回収不能な現前」である[18]。

＜現実界＞は，＜想像界＞と＜象徴界＞を通してのみ生きられ知られる「現実」と混同されるべきではない。これらの他の二つの界がこの仕方では発展しないとはいえ，これらは，自己が「他者における反映を通じて, また他者による認識によってのみ」自身を把握することが出来るというラカン自身の主張を担保するために彼がヘーゲルの『現象学』を召喚したことと関係していると私は考える[19]。しかしラカンはどのようなヘーゲル主義的綜合, その「把握」の不可避の不完全性, またもっとも著しいのは,＜現実界＞をイメージや言葉に導き出そうとする試みを，前もって示しはしない。というのも，これらは何故，＜現実界＞を描き出そうというラカンの試みが非常に理解しにくいかを明らかに説明してくれるからである。ボウイがラカンの欲求不満の読者を想起して言うように，＜現実界＞の構造が原始的で差異化されない全体 all を背景に現れるのを認めることは，それを名付け得ること，それを象徴的に加工しかつそれを自身の目的のために役立てることと同じことではない[20]。

＜想像界＞

ラカンは＜想像界＞を，古典的フロイト主義には全く欠けていた発達段階に光を当てる寓意を通して説明する。いわゆる「鏡像段階」である。およそ６ヶ月から１８ヶ月にかけて，概して幼児は，全体性の感覚，身体的統一性および主体的統合性の感覚を，鏡の中の自身の反映を見つめることによって発達させる，とラカンは主張する。子供の「彼の鏡面に移された自己像への歓喜的想定〔引き受け〕」を彼は同年齢のチンパンジーの反応と対照させる。チンパンジーはすぐに鏡と遊ぶことに飽き，他の気晴らしを求めてどこかに移動してしまうのである。しかし，この比較対照のポイントは，人間の発達を称賛するものではない。対照的に・・・

> 何かしら馬鹿馬鹿しく小さなものが鏡の前に近づいてくる。チンパンジーはそこで、鏡像が認識論的な空虚であることを認識できるが、子供は騙され続けたいという天邪鬼な意思をもつのである。子供の関心は、鏡面反射イメージの中における現実の身体とその鏡面反射のイメージの間および身体とセッティングの間における堅固な空間関係によって捕捉され(capté)ている。彼や彼女は心を奪われている(captivé)のであるのである。だが、ラカンがこれらのどちらにも好んで用いた語―それらの結び付けられた表出的な力をつなぎとめ凌駕する―は、道徳的で法的な人気取り〔おもねり・画策〕captationであった。すなわち、身体の複雑な幾何学であり、策略、偽装、丸め込みとして、個体に働きかけるセッティングであり鏡である。見たところ幼児にとって慰撫的で都合の良さそうな鏡は、罠ないしはデコイ〔おとりのアヒル：ルアー・擬餌〕なのである[21]。

この前＝言語的な記録 register が＜想像界＞を構成している。ラカンによるその性格付けの三つの特徴を、私は強調しようと思う。

第一はその固有の構成的「空間性」である。この場合ラカンは、少なくとも、メタファー以上のものを示している。ジェイムソンが認識するように：

> ＜想像界＞に関する記述は、特異なまでに限定された空間の布置を受け容れるよう，われわれに求めることになろう――それは，私自身の私的な肉体の個性化をめぐって組織化されるにはいたってないもの，私自身の中心的な視点に立ったパースペクティヴにしたがって階層的に差異化されるにはいたっていないものでありながら，にもかかわらず，それらとは異なる形で直観される肉体と形態に満ちたものなのだ。そしてその根本的特性は，誰か特定の観察者の行為の帰結たる可視性を備えることなく，眼に見えるということ，いってみれば常にすでに見えているということであり，身に帯びている色や表面の肌目と同じように反射

性をともなっているということであるように思われる。この点において――「知覚する者」を知ることのない「知覚すること」と，「存在すること」を差異化しないという点において――想像界に属する身体は，鏡像の論理そのものを例証している。とはいうものの，成人の日常生活の通常の客体的世界は，このような空間をめぐる初期の想像的経験をあらかじめ前提として存在しているのである[22]。

第二は＜想像界＞の視覚性 visuality である。ラカンはカイヨワの精神衰弱に関する研究に非常に関心を払っていた。そこでは自己とその周囲の空間の関係が，視覚的溶解を通じて支障をきたす。模倣があまりにも完全なので自己が空間に同化してしまうのである。「こうした疎外された魂に対して，空間はそれらを追い詰め，それらを取り囲み，それらを巨大なファゴサイトーシス（食細胞）のなかに飲み込んでしまうのである」とカイヨワは述べる。だが，カイヨワが境界付けられた自己の危機について述べるのに対し，ラカンはその対極，すなわち鏡面反射的自己同一化の形態に関心を向ける[23]。ラカンにとって視覚 vision は，客体からの主体の分離をもっとも手軽に確固たるものにするものであり，そしてまた「空間化の感覚に最も敏感に反応するもの」でもあるとグロスは論じる。＜想像界＞の中では，「空間は階層的に組織化され，可視的なものの卓越のもとにさらされることにより，中心化され単数化された視点によって構造化されている」[24]。

第三はその「二重性」である。ラカンはこの空間化され鏡像化された自己を明白に信用してはいない。そうした自己は「それを通じて主体が自身の真実の錯認へと誘惑される一致と堅固さの幻想」のうえに成り立っている。キーワードは「錯認」――ラカンが無理解・無知 *méconaissance* と呼ぶもの――である。それは事実上すべての批評家によって強調されてきた。かくして，「鏡像による「私 “I”」の捕捉は，断片化された主体とそれ自体の統合されたイメージの間のギャップの錯認とは切り離せないのである」[25]。そういうわけで，ラカンにとって，「身体，セッティング，鏡の地図は，子供を魅了しかつ慰める。だが，それは錯覚であり，罠であり，おとりである」。また〔イメージの〕地理は偽装の deception 媒体である。それは「「大いなる真実 ground truth」を提示するが，信用することはできない」[26]。

＜象徴界＞

この鏡の間から主体を解放する――あるいはともかく精神疾患への滑降を防止する――のが＜象徴界＞へと到るその経路である。このことは子供の言語への参入によって特筆される。そしてラカンの言語への拘泥は，彼自身の研究の注目すべき要素のひとつである。このことによって，私が言わんとするのは，彼が言語に与える分析的優先性以上のものである。というのも，ラカンの――彼の演説や著作における――言語でのはしゃぎぶりは，彼のプロジェクトの統合的な部位をなすからである。ボウイが言う様に，仮に「ラカンの著作がからかおうとし唆そうとしているのであれば」，その多様な「フェイント，言い訳，言い逃れ，模倣は」，（不）正確に，ラカンが話題にしているものなのであり，（非）厳密に彼が「示そう」とするものなのである。すなわち，仮に「無意識なるものが言語のように構造化されている」のであれば，その侵入は，他の複数の，暗示的で，異種混淆的である以上のものではありえないのである[27]。

意味作用的な記録 register としての＜象徴界＞のインスタレーションとともに，ラカンは，主体を，言語の中の一連の束の間の出来事へと効果的に変更する。すなわち「シニフィエ〔意味されるもの〕は，融通の利く位相的空間，ラカンの空虚な主体の旅程をプロットし再プロットする装置となるのである」[28]。この想像的分析的地図製作は，ルフェーヴルの空間的知識体系論のなかで，追放されたかたちで，再出現する，二つのルーツ（ルート routes ？）を有する。ひとつは意味作用の連鎖の内側にあり，もうひとつは間主観性のシステムの内側にある。とはいえ，これらは互いに互いを通して分節化されるのであり，私はこのどちらについても考える必要があると考える。

まず最初に，ラカンは意味作用の連鎖の中の結びつきの二つの様態を同定するために構造言語学を参照する。隠喩 metaphor は，言説と主体との関係を特徴付けるものと考えられ，換喩 metonymy は言説と客体との関係を特徴付けるものと考えられている。この策略の重要性は，それが無意識を「夢と会話のテクストを理解するべく必要とされる推測上のサブ＝テクスト」として扱うことにある。それは，フロイトが夢作用の根源的なメカニズムとして扱ったものとともに，これらの二つの修辞学的文彩を同定にすることによって，無意識なるものからオカルト的な性質を取り除く。かくして夢作用の意味作用的連鎖が，「凝縮」という隠喩と，「置換」という換

喩を同定することによって解読されるのである[29]。しかしながらこのこと以上に，ラカンはまたこの二つのプロセスの複雑なジェンダー化をほのめかす。ある語を別の語にメタファーが置き換えることで，意味するものと意味されるものの間のソシュール派の仕切りが横断され，また（ファリックな）「垂直性」のインデックスとして読まれ得る一方で，部分の全体への換喩的置換は，仕切りの片方に残されたままであり，女性性と「水平性」の近接を示唆する。かくして，客体的なものは，不在，欠落として，「言説の逆側」ないしは言説を「超えて」現れる。それは「欲望 desire」とともに措定されるのである[30]。

第二点は，これらの考察とも密接に結びつくことであるが，ラカンは，構造人類学，とくに，レヴィ＝ストロースの近親相姦の禁忌に関する独創的な議論を，エディプス・コンプレクスを言語的取引として概念化するために参照する。最も重要なことは，彼が子供のその母親に対する欲望の禁止と措定するこれらの営為体を，「象徴的な父」として同定したことである。その名は意味作用の連鎖の流動的な可動性を生じせしめるものと考えられている。ラカンが父の名と呼ぶものは，フランス語を巧妙に操って「父の否」‘Non’ du Père（禁止）と「父の名」‘Nom’ du Père（象徴化）を曖昧にしたことに起因している[31]。これらの禁止は，＜象徴界＞のなかに刻み込まれる。そしてこのことによって，ラカンは，以下のように，言語への参入と去勢を同一視し，この欠落ないしは欠損を「ファルス」と同定するのである。

> そのシニフィアンthe signifierとの関係を通じて，主体は，彼自身の，彼の生の何かしらを奪われる。それは，彼をシニフィアンと結びつけるものの価値と考えられている。ファルスとは，我々の術語であって，意味作用における彼の疎外のシニフィアンを指す。主体がこのシニフィアンを奪われているとすれば，特定の客体が彼にとっての欲望の客体となるのである・・・[32]。

ラカンのファルスは即座に直接，ペニスと同定されるものではないことを，すぐさま述べねばなるまい。それは物的な器官以前にシニフィアンを暗示するのであり[33]，彼の主要な論点は，言語的ないしは象徴的去勢に関するものであるとも。ジェーン・ギャロップがそのことについて言及するように，ラカンにとっての象徴は，「我々は我々が自由に駆使することのできない象徴システムのなかでしか自身を意味することが出来ない」ことを意味するのである[34]。しかしまた，このことは落胆の勧告でもない。ラカンの研究――その教育及び著作の――の難点は，それが我々の包括的理解の欠落を理解することを可能とするに違いなく，我々の欠損から学ぶのであって，(想像上の)豊饒性を回復するのではなく，言語的唆しを甘受するということにあるのである。ギャロップの読解戦略は，まさにこの可能性を開くものである。それ故，ある批評家は，彼女の「解釈の病理学」へと入り込む曖昧さと言い逃れを暴きだそうという彼女の試みと，彼女によるラカンの「不十分な運用能力」が，彼女のプロジェクトの中心的役割となるのは同じことだと批判した[35]。このように言語の境界を定めること，その限界を知らしめることは，しかしながら，明らかに，分析者ないしは批評家に限定されるものではない。ラカンはあらゆる間主観的行為の反射性（再帰性）を強調する。

> 最初は，他の主体が言語の壁の「背後に」永久に隠されているように見たとしても，すべての主体がこの壁の同じ側にいることが明らかになるようになる。とはいえ，彼らはそれらに対する彼らの発話の反響によってのみコミュニケートすることができるのであるが[36]。

一般的には，そういうわけで，ラカンの企図は，＜想像界＞が＜象徴界＞へ到達しようとするのを妨げる「潜在的な倫理的要請」とギャロップがいうところのものの中にあると結論付けることができよう。彼による精神分析の強烈な再構成は，（鏡の粉砕・・・・・＜想像界＞の）「眼球中心主義 ocularcentrism」への批判を通じて行なわれた。それは同時に「ロゴス中心主義」を承知するものでは全くなかった。時にラカンは＜象徴界＞を＜想像界＞より特権化させているかのように見える。というのも，彼が言語の戯れの中で歓喜するため，また「視覚的豊穣性のアリバイ」を打破するためであるがゆえに全く正しい[37]。だが，また彼がすべてのこうした二項対立――それは事項をこのように表現し，あるものを他のものより特権化することで，＜象徴界＞への＜想像界＞の侵入を指し示す＜想像界＞の継続的存在感と持続的力を示すものである――を非常に疑しく思っていたことも事実である。

ルフェーヴルの知識体系論

『空間の生産』の中でルフェーヴルが直接ラカンに言及したのはたった4回であり，通常は脚注においてであって，本文の中ではなかった。だが，こうした僅かな引用が示す以上により多くのものを，彼はラカンに負っている。序文で，彼はラカンから多かれ少なかれ間接的に引っ張ってきた空間的知識体系を素描している。

> ついには社会空間が二重の禁忌のタームで説明されるようになる。ひとつは，子供（男子）を母親から切り離す禁忌――つまり近親相姦が禁じられている――であり，もうひとつは，子供をその身体から切り離す禁忌――というのは，意識を形成する際に言語活動が身体の直接的な統一を断ち切るからである――である。それは・・・（男の）子供が象徴的な去勢に悩み，自分自身のファルスを外界の一部として客観化するからである[38]。

このことは，いかにルフェーヴルが彼自身の知識体系を構築しているかということを言っているわけではない。彼も論じるように，空間の精神分析にとって重要なことは，それが「ファリックな垂直性」と水平的分割の空間的な書き入れを分析するための立脚点を用意するということである。空間の歴史学のなかで彼は特に，抽象的空間の男性中心主義に対して，また「（出来事が生ずる）舞台 scene と猥褻さ obscene をともに定義し，この空間において起こりえないこと，起こってはならぬことをその舞台や猥褻さの中に追いやる，壁，囲い，ファサード」に対して関心を払った[39]。しかしながら，仮にラカンに対するルフェーヴルの批判が特異なものであるとしても，このことはその力を貶めることにはならない。彼は，精神分析の帝国主義と彼の考えるものについては，もっとも批判的であるし，また何事をもその用語で説明することは「耐え難い還元主義と教条主義をもたらすだけである」と強調する。だがラカンの研究は，こうしたコメントがほのめかす以上に大きな影響をルフェーヴルのプロジェクトに与えてきた。というのも，空間の生産に関する彼自身の主張の多くが，精神分析との批判的な対話を通じて進められてきたからである。多くの仕方で，上のパッセージの中で記された空間的知識体系論へのルフェーヴルの反応は，彼自身の議論のパラメーターを提供するものと私は考える。そうした図式が「論理的にも，認識論的にも，人類学的にも，空間に対する言語の優先・先行性 priority」を想定しており，社会空間の核心に，生産的活動ではなく，禁止をもちこむものと，彼は異議を唱える[40]。以下で示すように，彼自身のプロジェクトはこうした優先・先行性を逆転させることにあるものと思われる。だが，逆転させることで，彼の研究は同じ概念格子を，追いやられ歪められたかたちにおいて，繰り返してしまうのである。

「身体の知性」

ルフェーヴルのスタイルは多くの場合，ラカンの場合と同様，暗示的である。彼は，同時に言語＜への＞疑念であるような，言語＜における＞似たような歓びを共有している。「人は言葉だけでは生きていけない」と彼は言明する。「まず最初にトポスがあった」。「ロゴスがやってくるよりもずっと前に」。この謎めいた言いまわしで彼が喚起しようとするのは，緊張した有機体的空間性，つまり「身体の知性」である。それは，実践的活動が起こるところに根差し，また構造人類学を遠まわしにかすめて彼の名付ける「自然の領有の基本構造」なるものと密接な関係をもっている[41]。ルフェーヴルは，空間と身体の関係が「結果的に退化し喪失されてしまう即時性」を有する時には，それらの始まりの遥か以前から，「歴史的」であれ近代的であれ，時間について語り，「抽象的」空間性について語る。かれはこの「抽象的空間」を「生物学的＝空間的現実」のなかに接地させる。だが，それは明らかにラカン派的「現実界」の社会的地平への投影ではないのだ。親密さだけでなく豊穣性の含意もあるし，それは，測量と表象の実践における抽象空間の濃密な形成から切り離すことは出来ない。それらは，社会のすべての構成員に，彼ら自身の身体のイメージとその鏡像 reflection を示して見せるのである[42]。このどちらもラカン派的「現実界」の社会的地平への投影ではない。これらの「イメージ」と「鏡像 reflections」は，身体の肉体性から切り離されるもの，また自然的世界の物理性とも切り離されるものではなく，完全にそれらと連続しているものなのである。それらは類推的かつ世界観的な空間を，その意味が何らかの切り離された象徴的な記録 register に割り当てられることのない，抽象的空間の中で形成する。すなわち，それらはルフェーヴルがラカンを追放するように，そのなかで「イメージが現実なるものへと変化する」世界に属しているのである[43]。

この言いまわしの中での歪められたラカンの反響

を疑う余地は無いが，異なった比較によって，私はルフェーヴルの議論をはっきり（そしてこうした歪曲を明らかに）させてみようと思う。ミシェル・フーコーはすでに，人間の身体が「世界の地図の可能な半分である」ことを指摘していた。彼は一連の活き活きとしたビニエットによって主張，その多くは『言葉と物』を読んで驚いた歴史家には知られていない，ないしは見分けられない主張を説明する。例えば･･･

> 人間は世界の諸相のまえにたちはだかり，天空と関わりをもつ（人間の顔とその身体との関係は，空のおもてとエーテル〔天空にみなぎっているとされた精気〕との関係に等しく，その血管に脈の打つさまは，さながら星がそれぞれの軌道をめぐるのに似ており，その顔の七つの穴は，天なる七つの惑星と同じ相をなしている）。しかし，人間はこれらすべての関係を地上に落下させるのであって，人間という動物とそれが住む大地とのあいだの類比にも，これらの関係が掃除したかたちで見出されることとなる。すなわち，肉は土塊，骨は岩，血管は大河である。膀胱は海であり，人体の七つの主要部分は鉱山の底に隠されている七つの金属にほかならない[44]。

「人間 Man は，これらの類似をそこから彼がこれらを受け取る世界に伝えるのである」とフーコーは書いた。そしてフーコーにとって――ルフェーヴルにとってではないものの――，「直接的類似の空間は，＜開かれた大きな書物＞のようなものとなる」。すなわち，「物がその底に映り，そこでたがいの像を反射しあっていたあの巨大で静穏な鏡は，実は言葉〔パロール〕のざわめきに満ちているのだ」[45]。確かに，フーコーは 16 世紀ヨーロッパのエピステーメーについて述べている（彼はそう言った）。その一方で，ルフェーヴルは，時間と空間の中で全く異なった文化を呼び出すのである。だが，これらの違いは歴史的・地理的な弁別的特徴以上のものである。仮にルフェーヴルの絶対空間の「大きな鏡」もまた「世界についての散文」を見せるのだとすると，仮にその言語もまた「世界に降ろされ，その一部を形成するのであれば」――私はこれらの言葉をフーコーから引っ張ってきた――，それは共感的には同じような仕方ではテクスト化されず，書かれた世界を特権化することもない[46]。ルフェーヴルは，絶対空間は多様な手段によって特徴付けられていると述べ，そしてこの意味で，「実践的活動は自然の上に書かれていく」ということが出来るのだと認めた。しかし彼は，＜テクスチュアー〔組織・構成〕＞の生産について語るのを好んだのであってテクストについてではなかった。空間と言語空間の類比は「今のところ持ちこたえているだけである」と彼は警告する。というのも，空間は「読み取られる前に生産される」からであり，読解――解読――されるために区分化や方向付けによって特徴付けられるものではない。それは「むしろ身体を持つ人々によって＜生きられる＞ために」あるからである[47]。

ルフェーヴルの空間の歴史学は，この有機体的空間性の性質低下を再構築するものである。そして彼のプロジェクトに何かしらノスタルジックなものがあることは既にはっきりしている。その特徴的なヒューマニズムとロマン主義の結合は，ラカンと正反対の方向に向かっている。ルフェーヴルが失われた豊穣さへの哀歌を提示し，ところどころで「真正性」や主体性がある種の物質〔肉体〕的な擬態〔模造物〕を通じて回復できるという希望を抱いているように見える一方，ラカンの＜現実＞はつねにすでに表象＝再現や回復に抗している。ルフェーヴルのと似ていなくもないポジションにあって，ラカンは「充足〔満足・実現〕の助祭長であり，彼には，あらゆる欲望は欠乏と不満の悲劇と深く結びついている」，と，このようにメルキオールは見る[48]。ルフェーヴルは彼の＜現実＞への，マルクスがかつて「その存在の全体的豊かさにおける人間」として描いたものへの回帰を切に願う。その一方で，ラカンはそうした回帰のすべてを除外する。（このメタファーを拡張できるものとすれば）「豊かさ」は現実界，想像界，象徴界の三界全てに投資されるのであり，人間存在は必然的に三つ全てを充分に利用するのだと。

二人の思想家の間の緊張は，さらに度合いを増す。というのも，ルフェーヴルはこの有機体的空間性の零落を同時に「発達的」かつ「歴史的」なものとして扱っている。そして彼の議論はこれらの異なった時間性に滑り込みまた滑り出る。このことは説明 exposition を困難なものにする。部分的には，これらのズレが両義的な場（時として言い逃れの場ではないかと私は疑っている）を特徴付けるからであり，また部分的には，ラカンの扱いが発達的なやりとり register の中だけで行なわれているからである。しかしながらルフェーヴルにとって，空間の政治と身体の歴史および空間の歴史とは不可分である。また，先に述べたように，彼は脱身体〔肉体〕化の歴史的過程を通じた抽象空間の形成（かくして，これは二重の「抽象化」となる）に特に注目している。引き続くルフェーヴルについての私の説明がラカンにつ

いての私の説明と並行するとはいえ，こうした理由から，私は，折々，ところによっては，明確な飛翔の航路から錯綜した迷宮へと不可避的に方向転換してしまうであろうような展開を追う必要が生じるものと考えられることを希望する。

「苦悩 dread の果実」[49]

ルフェーヴル自身の鏡をめぐる議論を再開しよう。それは明らかにラカンによって（そして間接的に，アルチュセールによるラカンの読解によって）刺激されたものである。ルフェーヴルは精神分析家が鏡像効果についてあまりにも自由に戯れ，それを「心的『位相幾何学 topology』の形式に内面化された空間の一部としてみなすことで，その適切な空間的コンテクストから」抽出していることに不満を持っていた[50]。これは，そのより一般的な形態において，ルフェーヴルのプロジェクトにとって原初の刺激を供する異議申し立てである。すなわち，他の思想家たちは「哲学的＝認識論的な空間観念を物神化させ，心的領域が社会的領域と自然的領域を包み込んでしまうようになる基本的な詭弁」を控えることができないのだという[51]。ラカンの場合，「鏡は言語活動による身体の裁断化の傾向を食い止めてくれる。だが鏡は，実践的であると同時に象徴的（想像的）である空間に向けて，またそのような空間の中で，《自我》を透明性へと導く代わりに，《自我》を硬直した形式に封じ込めてしまうのである」とルフェーヴルは注意する[52]。厳密にラカン的な意味でこれらの語を理解しようとするなら，「想像的」と「象徴的」の間の省略は明らかに問題である。だが，それはまさにルフェーヴルの目論見なのである。彼はこの二つを社会空間の中に二重に刻印＝内接し，その接合の物質性を明らかにしようとするのである。「鏡は，まず自然の生活によって，ついで社会生活によって生産される空間に，二重の空間領域を本格的に導入する。つまり，ひとつは起源と分離に関して想像的である空間であり，もうひとつは共存と差異化に関して具体的で実践的な空間である」[53]。

この二重の刻印＝内接 inscription について説明しよう。ルフェーヴルは鏡と鏡像効果を用いることによって自己の構成における社会空間の生産に関わる秘密裡の関与を示唆しようとする。

> 一方で，ひとは…自分を空間に結びつけ，空間の中に自らを位置づける。ひとは自分自身の直接性と客観性とに同時に向かい合う。ひとはみずからを中心に置き，みずからを指示し，みずからを測定し，みずからを尺度として利用する。…他方で，空間は媒介的（中間的）な役割を果たす。それぞれの平らな表層を越え，それぞれの不透明な輪郭を越えて，「ひと」は何かをほかのことをめざす。そのために社会空間を，もっぱら光によって占領され，つまりもっぱら「存在presence」と影響によって占拠された透明な媒体として打ち立てようとする傾向が出てくる[54]。

二重性としての社会空間の生産は，意味深い帰結をもつ。というのも，ルフェーヴルは「身体の空間から空間の－なかの－身体」への転換が，「精神活動からの離脱 spiriting-away」ないしは暗化 *scotomization* を助長すると示唆するからである。この言葉は 19 世紀の眼科学に由来し，視野の空白部分を通常は指しており，1920 年代にフランスの精神分析理論に導入された。のちにラカンによって視覚的なものと言語的なものの特殊なもつれあいによって生み出される精神疾患を診断するべく借用されることとなった。ルフェーヴルはこの語を，発達的な意味よりもむしろ歴史的な意味で用いている。だが，後で見るように，それは視覚的なものと言語的なものの重なり合いを残しているのである[55]。

ルフェーヴルは，空間は，そもそもすべての感覚—味覚，嗅覚，触覚，聴覚，視覚—を通して知られ，特徴づけられ，生産されるし，またこうした仕方すべてにおいて「身体の知性」と関連しているのであるが，それが純粋に視野として構成されるようになってきたのである。彼はこのプロセスを鏡像効果の一般化と表象する。その中で社会空間はそれ自体，集合的な鏡となるのである。しかしながらラカンとは異なり，ルフェーヴルにとっての鏡の重要性は，その反射が「主体＜として＞私の統一性を構成する」というよりはむしろそれが「私であるものの＜記号＝兆候 sign＞へと私であるものが変換する」ということにある。そういうわけで，ほとんど同じ仕方で，ルフェーヴルは社会空間の「象徴的イメージ」のなかでは，「「わたし」を生む記号は，わたし以外のものを生む記号と関わりを持つだけとなる」。結果として「空間は反省する「主体」にとって鏡のようなものとして差し出される。だがルイス・キャロルに倣って言うならば，「主体」は鏡の反対側へとすり抜け，生きられる抽象となるのである」[56]。この集合的—かつ歴史的—な経過は，絶対空間から抽象空間への変化を特徴づけている。

この過程がゆきつくところでは，空間はもはや強度の視覚化という社会的存在を，攻撃的で抑圧的な視覚化という社会的存在をもつだけとなる。それゆえそれは純粋に視覚的な空間である。それは象徴的な意味においてではなく，事実においてそうなのである。視覚の領域が優位を占めることによって，一連の代替substitutionsと転移displacementsが生み出され，これらの代替と転移によって，視覚的なものが全体的な身体の地位を押しのけ，その代わりを務めるようになる[57]。

ルフェーヴルは二つの側面から「視覚化の論理」とよぶものの見取り図を描く。ひとつは＜換喩 metonymy＞であり，彼はそれが「眼，まなざし，見られるもの」を「もはや単なる細目や部分ではなく」し，「全体性へと変貌」させることから，＜スペクタクル化＞の軸として扱う。視覚が他の感覚に対しその優位性を行使すると，その結果：

味覚・嗅覚・触覚，さらには聴覚に由来するあらゆる感覚がまず弱まり，ついでそれらの感覚が直線・色彩・光を前にして消え去る。こうして物の一部が，また物によって提供されるものの一部が，全体として見なされるようになる[58]。

二つ目は＜隠喩 metaphor＞であり，それは，言葉 words がイメージの代用となり，社会生活の営みが「テクストの単なる読解」と同義になることによる＜テクスト化 textualization＞の軸として扱われる。

生きた身体，つまり「ユーザー」の身体は，単に細分化された空間の歯車に組み込まれるだけでなく，映像，記号，象徴など，哲学用語で「類同代理物analagons」と呼ばれるものの綱目によってもとらえられる生きた身体は自己の外部に追放され，移転させられ，眼を通して空虚にされる[59]。

ルフェーヴルとラカンの間の平行線と接線，共鳴と不協和はほとんど明らかにすることができないが，ルフェーヴルはこれらの考えをニーチェに帰するものと考える方を好んだ。他の感覚に卓越する視覚の歴史的優位を暴いて見せたのはニーチェである，と彼は言う。ニーチェは「抽象的思考を構成する隠喩と換喩が視覚的性格によって支配されている」ということを同定したのだと[60]。この認知は重要である。というのもそれが，ルフェーヴルのプロジェクトに対するニーチェの一般的な重要性を指さしているだけでなく，それが彼自身による隠喩と換喩の説明の歴史的種別性を強調しもするからである。彼は，多様性を理解できない「均質化 homogenization」的説明を供する精神分析の私物化を酷評している。例えば彼は，「記念建造物 monuments」と「建築 buildings」に対するその考えのなかで，こうした言語的操作を表面上ラカン派の用語で扱い，それらがもたらす圧縮と転移を同定する。だが彼はまた，「意味するものと意味されるものを分かち，欲望とその対象を分かつ」ソシュール学派のかの有名な仕切りは，異なった社会空間のなかでさまざまに位置づけられるのであり，これらの概念はそれらが「どの特定の力 power が稼働しているのかという問題に言及」されるまでは多くは説明されずじまいであると強調する[61]。この理由から，前述の議論が隠喩的次元と換喩的次元に関っていること――それらと連動するマテリアルと他のプロセス＝領域のなかでのそれらの働き operation の効果は異なったものとなるであろう――，またルフェーヴルが「抽象化」を非常に特殊な仕方で用いていることを強調することが必要だと私は思うのである。

さらにその理由に注意してみよう。ルフェーヴルは，ラカンにとっての意味作用の秩序となるであろうものを出現させるべく鏡なるものを用いる。想像界と象徴界を同一の社会空間になかに内接させることで inscribing，ルフェーヴルは二重の疑いを表に出すことができた。はじめに，彼は眼球中心主義 *ocularcentrism* を牽制する。

幻想が存在するところではどこでも，光と視覚の世界が完全で統合的な役割を…果たしている。光と視覚の世界は抽象を物神化し，抽象を規範として強いる。この世界は，その不純な内容から，つまり生きられる時間から，日常の時間から，不透明で充実した身体から，身体の温もりから，身体の生と死から，純粋な形式だけを引き離す[62]。

このことは同時に発達的なテーゼであり歴史的なテーゼでもあり，私はそう受け取るが，またそれは，空間――より特定的にいえば抽象空間の――の生産が透明性と不透明性という（二重の）幻想によって多くの場合隠蔽されてしまうというルフェーヴルの主張を引き受けるものである。エドワード・ソジャはその後，空間性の慣習的な理論化における二つの幻想を同定するためにこれらの文彩＝比喩 trope を利用し拡大適用した。「意図的な理想主義 idealism

と非物質的な反省的思考の直観的領域へとその生産物を投影することによって，社会生活の具体的空間性を打ち破る」「遠視的幻想 hypermetropic illusion」と，「それらを越えたところに見ることの可能な存在を見ることなしに直接的な表面的あらわれに関心を向ける，空間性の近視眼的な解釈を生産する「近視的幻想 myopic illusion」である」。これらは重要で洞察に満ちた所見であるが，ルフェーヴルのもともとの主張は，ディシプリンの問題でもディシプリン横断の問題でもない。これらの幻想はアカデミーに――「理論」に――けっして限定されるものではないが，社会空間の物的構成に，すなわち彼が「いかさま―としての―世界 the world-as-fraud」と呼ぶものに関係するものである[63]。

第二に，ルフェーヴルは＜ロゴス中心主義 logocentrism＞を警戒する。彼は言語に向かう二つの方向性を区別する。ひとつは記号論と構造主義に由来するものであり，言語の法外さを伴うものである。そのもっとも極端な形式において，それはそのなかでは「すべて―音楽・絵画・建築―が言語である」ようなフォルマリスムとなる。そしてそういうわけで，それは「ロゴス」なるものの救済へと向けられるのである。もうひとつは，エレジー風というよりは，悲劇的なものである。記号，すなわち「言葉と死の間の親密な結びつき」の陰気な脅かしについて，それは立ち入って考え，また，すべての権力と権威の基盤としての「ロゴスなるものの秘密」を暴きだす[64]。ルフェーヴル自身の共感は後者にほど近い。

> この裂け目は，ほこりや型通りの言葉が散乱する死の地帯である。この裂け目にすべりこむことによって，意味は生きられる経験の抱擁から離れ，官能的な身体からみずからを引き離すことができる。言葉と記号が隠喩化を促し，隠喩化を挑発し，隠喩化をかきたて，そして少なくとも西洋においては，隠喩化を指令する。言葉と記号は物理的身体を自我の外へと追放する。魔術性と合理性が解き難く絡み合ったこの活動によって，（言葉による）肉体の引き離しdisembodimentと（経験による）再度の肉体化との間の奇妙な相互作用が，故郷喪失uprootingと再定着reimplantationとの間の奇妙な相互作用が，抽象的な方向での空間形成と特定の広がりにおける位置確定localizationとの間の奇妙な相互作用が，はじまる。これこそ，はじめのうちは生命の初期段階における混合空間――なお自然的ではあるが，すでに生産された混合空間――であり，のちに詩と芸術の混合空間に，要するに表象の空間になるのである[65]。

発達的時間性と歴史的時間性の間の省略が，このパッセージでは特に明確である。ルフェーヴルは暗黙のうちにラカンに言及している。そして彼は無意識は，「言語の出所 source として」ではなく，むしろ自己を構成しようとする自我と身体の間の裂け目として扱われるとほのめかしつつこれらの所見を前置きする。その結果「裂け目に滑り込む」ものは，「言語，記号，抽象化であり，すべては必然的でありながら宿命的であり必須でありつつ危険なものである」。だが彼は，歴史的なテーゼをあらかじめ示してもいる。その中で空間の生産が進歩的で挑戦的なロゴス中心主義によって特徴づけられるのである。「ロゴスは目録を作成し，分類し，整理する。ロゴスは知を開拓し，それを権力のために役立てる」のだと[66]。

先に示唆したように，こうしたスペクタクル化とテクスト化のプロセスは，＜抽象空間＞の歴史的生産と関係している。＜抽象空間＞というこの語は同時に，完全に精密 accurate であるが徹底的に詐欺的 deceptive でもある。「抽象とは，物事が具体的に『存在』することに対して，『存在しないこと』を意味するものと考えられている。だがこれほどまちがった考えはない」とルフェーヴルは警告する。彼がこういうのはまさしく，抽象空間が中空なものではないからである。彼の見解では，「記号には人を死に至らしめる力がある。というのも，抽象が「荒廃と破壊」―とくに暗化 scotomization―を伴うだけでなく，＜それらが抑圧装置を設置する＞からでもある。資本主義的近代の記号＝看板 sign(s) のもとで生産される，この「透明性と読みやすさという視覚空間」は，「知と権力の間の交換，空間と権力をめぐる言説の交換，が増殖しかつ統制される」類のものである。誤解を恐れずに言えば，ルフェーヴルの批判は，疑似＝フーコー的言説空間の構築に限定されるものではないし，同時にまたこのフレーズが含意するように，何ものも監視から逃れることができない，また「空間の読解」という理論的かつ日常的実践が，従属（束縛）*assujetissement* の言説テクノロジーと関係しているような，空間の規範化 normalization に限定されるものでもない。確かにこれらは重要な問題であり，ルフェーヴルは（フーコーと同じ仕方で取り組んでいないとはいえ）これらを無視してはいない[67]。だが，ルフェーヴルはまた，抽象化の暴力――空間の平坦化，プランニング，空虚化――が欲望 *desire* を解放し同時に誘惑しもすることを強調する。「それは欲望を透明な状

態で指し示すのである。」[68]。

ルフェーヴルがその見取り図 topography を詳細に展開しなかったとはいえ，欲望の発動 invocation は大いに重要である。というのも，それは抽象空間がすっかり退去することなどありえないからである。それとは対照的に「この空間は真に完全なもの a truly full object を要求」するとルフェーヴルは論じる。「この < 意味するもの > は，空白を意味するのではなく，むしろ空間が破壊力に満ちていることを，それゆえ充満という幻想を意味しており，また空間が神話を運ぶ「物」で満ちていることを意味している」[69]。これにより，抽象空間の中に（ラカン派のいう）ファルスが大書され，物理的に刻み込まれることが明らかとなる。

> 隠喩的に言うと，この空間は力を，男性の豊かさを，男の暴力を，象徴化する。ここでもやはり部分が全体と取り違えられる。ファルスの残忍性は抽象的なままではいない。というのも，それは警察・軍隊・官僚主義といった政治権力の残忍性であり，強制手段の残忍性だからである。<ファリックなもの>の勃起性は，垂直性をとりわけ重視する。<ファリックなもの>は，男性による女性支配が向かうべき空間の方向であり，このような空間的実践を生み出す過程（それは隠喩と換喩の二重の過程である）の目標であると宣言する[70]。

仮に，このことがラカンが思い描いていた以上に明確な = 硬直した starker 構築物 architecture であるならば，その物質主義（唯物論）があまりにも粗野に見えるならば，このことは，ルフェーヴルが解説的な素描しか提示していなかったことによるからであろう。それはより繊細な議論が展開されるべき必要のある場を示す兆候として在る。だが，そのプロジェクトの性質は，いま明らかとなるべきである。ルフェーヴルは，《眼》，《ロゴス》，《ファルス》といった三つの主要な要素をともにラカンから援用し，それらを抽象空間の歴史的生産を注釈し，（非常に特殊なやり方で）解明するために利用する。彼がそれを特徴的な華麗な身振りで示すように puts it with a characteristic flourish，「《王者ロゴス》を守るのは《眼》である」。これはラカンを魅了するのと同じ言葉の戯れ play において，「《父》の眼」と彼が呼ぶものである。また他方では《ファルス》にもよっている。これらの所見をまとめつつ，「書かれた言葉と歴史の規則の空間」が表象され生産されるのである[71]。

ルフェーヴルは，支配的な男性中心主義を暴きだし異議を唱えるために，こうした考えをつかう。彼は二重の議論によってそれを行う。第一に，彼は不断に，ラカンの概念的三位一体のジェンダー化を強調する。そうすることで，この抽象空間に記される男性中心主義を確証するのである。

> 抽象空間においては…身体の死は二重の性格を持つ。ひとつは象徴的な性格であり，もうひとつは具体的な性格である。身体の死が具体的な性格を持つのは，暴力が作用するからであり，象徴的な性格を持つのは，身体の生きた統一性が断片化されるからである。とりわけ女性の身体が断片化される。女性の身体は，交換価値へと，商品の記号へと，そして商品それ自体へと，変貌を遂げる…[72]。

ルフェーヴルは繰り返し，抽象空間の詐欺的な「透明性」と男性中心主義的暴力の間の接合を指摘する。そして，この空間の象徴的イメージに折り合いをつけようとする彼の問題含みの試みと地理的想像力の男性中心主義に対するジリアン・ローズの批判の間には鋭い poignant 結びつきが存在する。その中にあっては，理論においても実践においても，「何もない路上の無垢な透明性」は，彼女やまた多くの他の女性たちにとって，「私をせきたてる攻撃的なプラスチックレンズ」となるのである[73]。ついでルフェーヴルは，男性中心主義 phallocentrism が，いかに恐ろしいほどにまで人間としてあるべきものにとって破壊的なものであり，それゆえそれがもっともパワフルな疎外の媒介のひとつとなるかを示そうと試みる。「抽象空間の支配の全体にわたって，ファリックな孤独と欲望の自己破壊，そして現実界の充溢からのその暴力的な切断は，去勢に等しい」と彼は書いている。

> 「抽象空間は二重に去勢される。抽象空間は，まずファルスを孤立させ，それを身体の外部へと映し出す。ついでファルスを空間（垂直性の空間）に固定し，それを眼の監視下に置く。視覚の領域と言説の領域が，記号の世界において互いに強化され，関連付けられる[74]。

歴史学，考古学

いかにルフェーヴルの空間の生産に関する説明がラカンの精神分析理論を検討することによって解明されうるか，を示そうとしてきたとはいえ，これはそれを読解する唯一の方法というわけではない。『空間の生産』は，様々な多くの材料によって構築

されており，そのパッセージを通過するための単一のルートなどというものは存在しない。ラカンとの最もはっきりとした違いの一つは，これまで何度も言及してきたように，ルフェーヴルが＜史的＞唯物論に密接に，決定的に近接しつつ＜歴史＞について提示していることである。ルフェーヴルの見解では，精神分析は致命的な欠陥を有している。「歴史的時間の中で生まれた社会の因果に関する非＝時間的な見解しか有していないのだ」[75]。彼自身の仕事のオリジナリティは，西欧マルクス主義の中では，この空間の歴史と身体なるものの歴史の間にもくろまれたコネクションのなかにある。しかしながら，正しくこの理由から，ラカン経由のアプローチが明らかにされるのだと私は思う[76]。だが，それを隠しつづけることもまた出来るだろう。そしてルフェーヴルの企図の歴史性には，強調されるべき三つの含意がある。

第一に，ルフェーヴルは，人間の身体の分解 decomposition と社会空間の脱身体化 decorporealization を「言語のせいだけにする」ことはできないということに拘っている。彼の見解では，そうした術策は，「身体なるものを誤解し軽蔑しそれを悪魔のもとにでなければ納骨堂へと追放する」ユダヤ＝キリスト教的伝統と，また，「結合されざる部位の単なる寄せ集めへと身体を解体することについて言語学的言説と同じくらいに影響力を有する」資本主義的生産様式および進歩した分業，この両者を，誤ったことに無罪放免としてしまうからである[77]。ルフェーヴルが史的唯物論を堅持するのはこの理由によるし，またそうすることで，彼はデイヴィド・ハーヴェイの史的＝地理的唯物論と非常に似通ったものへとそれを変化させるのである。非常に似てはいるが，全く同じという個所はほとんどない。ポストモダニティに関する最近のハーヴェイの著作は，あきらかにルフェーヴルの研究に触発されたものである。そして彼はイメージや鏡，表象について多くを語った。だがしかし，（ジェイムソンがラカンを引いた個所を除けば，とはいっても行きがかり上のものにすぎないが…）彼はまだ精神分析に手をつけてはいない[78]。

第二に，ルフェーヴルの長期にわたる空間の歴史（学）には，メタ物語としての「視覚化の論理」の積極的な優位性を扱う傾向が確かに存在している。だが私はこのことは戦略的なものであって，規定的 stipulative な目的のためではないと考える。彼は空間の脱身体化が単に重要なテーマであることを主張しているのではないし，それが他の可能な物語や petits rècrits〔小文？〕のなかで最も包括的に寄せ集められるようなものといっているのでもない。しかし，それはずっと等閑視されてきたが，どのように批判的な空間政治にとっても肝要な厳しい要点 a vital, terrible salience なのだと言っているのである。このことはまた，ルフェーヴルが，彼の時代の他の多くの著述家以上により直接的にジェンダーやセクシュアリティ，男性優勢主義的暴力の問題―また社会空間へのそれらの刻み込み―について語ることを可能にした。無論，視覚化の論理に議論の余地がないというわけではない。そのメタ物語を妨害し解体しようとする多様な試みが存在している。ルフェーヴルは具体的な言葉でそれらについて語ることはほとんどなかった。メタ哲学的なレベルのまま残すことを好んだのである。ルフェーヴルはニーチェが「ロゴスと反＝ロゴス」と呼んだものの間の，そして「抽象的な空間の爆発的な生産と他としてある空間の生産」と彼が理解したものの間の「大いなる闘い」を重視した。彼自身の批判は，不愉快なメタ物語の覇権に異議申し立てを行うことを意図していたのである[79]。

ルフェーヴルが異議申し立てを強調するのは政治的な要求であり，これは入念なまでに政治的である。そして彼のプロジェクトは，現在と同様過去における―真に人間的な空間の構築のための―抵抗の拠点を置こうというものである。フーコーがその語を使うような意味での「現在なるものの歴史」を，彼は，少なくとも彼の著作で提示できる限りは，提示している。ジョン・ライクマンは「現在なるものの歴史」には二つの意味があるという。ひとつは：

> 「現在」というものは，われわれにはわからない仕方で過去に根ざすところの現行の手順のなかで構成されているあのもろもろの物事にかかわるのであり，過去の「歴史」を書くとは，この構成とそれがもたらす諸結果とをあらわにすることである。

ルフェーヴルのプロジェクトは，確かにこの仕方で読むことができる。まさに空間の歴史という考えは多くの著述家や批評家たちから長い間等閑視されてきたのだ。しかしながら，第二に：

> われわれの今日の状況が，過去の状況の定石どおりの所産であるとか，その直前の歴史的な「情勢」によって必然的にもたらされたものであるとかを，フーコーは示すのではない。それどころか

> 彼は今日の状況を，歴史によって「必然的にもたらされた」ものではないものに見えるように，しかもいっそう特殊な，独自な，あるいは恣意的なものに見えるようにしようと努力する[80]。

ルフェーヴルの空間の歴史（学）が歴史主義である限り，それは必然的にこのこと以上に「単数化」されるものではない。しかし，それは時としてベンヤミンがかつて布置〔星座〕と呼んだもの―私にはこれ以上良い言葉が浮かばない―をも提供する。そのなかで現在なるものに（忘失された，まさに抑圧された）過去が爆発的に侵入することが可能となるのである。

第三に，そういうわけで，直接的にこの主張を受けるならば，ルフェーヴルは空間の歴史（学）を，人類学と政治経済学の間のどこかに位置づけようとしていたことにある。彼の「人類学」は，発達的なものと歴史的なものとの間のもう一つの厄介なズレの場である。ルフェーヴルは，空間の「歴史」(学)は，「生物学的＝空間的現実」の充溢が失われたことにより開始されたとほのめかす。そして彼は明らかに，非＝近代的な社会とそれらの空間が，「身体の知性」とその有機体的空間性とより密接な何者かであると確信している。だが彼はまた，こうした生物的共振〔共鳴〕はわれわれ自身の悩ましい現在にも持続しており，全面的な人間の未来への遠いささやきを与えていると論じる。

> だがすべてがすっかり消え失せるというわけではない……もっぱら痕跡や思い出や過去の遺物によって定義しうるわけでもない。空間においては，先行のものが後続のものの支えとなる。このような社会空間の諸条件は，その空間の内部に固有な形で持続と現実性をとどめる。……空間の知識体系の任務は，「成層」，動植物界，堆積層といった短絡的な比喩を用いて……（原初の自然がいかに）存続しているかを描写し，分析し，説明することである[81]。

部分的にはこのことは，ルフェーヴルの「リズム分析」が回復しようとしたものである。それは,「その実存が仲介を通じて，徴候 manifestation の間接的な効果を通じて」，こうしたリズム，いわばこうした充溢の回路を発見しようとするものである。彼はそれらの存在 presence は，「分散し破壊されたリズムが再構成される」夢の空間の中に残されていると主張する。そしてこの理由により，彼はリズム分析が「最終的に精神分析を見くびる」ことがないかどうか思案するのである。これはうぬぼれの強い希望であり，ルフェーヴル自身が開陳するところにおいてさえ，彼が思い描いていたものよりははるかに不鮮明なものであった[82]。だが，こうした音を消されたリズムはまた，「日常生活」という近代的圏域のなかにも，モダニティの日々の実践と表象のなかにも，記し残されている。これをルフェーヴルは「失われた充溢のパロディーとその充溢の残されつづけた痕跡」の両方と見なしている[83]。このことはおそらく探索の，もっと期待できる手段でありうる。とはいえ，その哀歌調のロマン主義はきわめて厄介なものとして残り続ける。だが，どの出来事においても，彼の企図が全面的に贖い的なものであることは明らかなようである。

この三つのコメントの間にあるものは，しかしながら，精神分析理論へと私を回帰させる批評の空間なのである。ルフェーヴルが空間の生産に関するその説明を，抽象空間の「矛盾〔否定〕」と「差異の空間」の可能性について考えることで締めくくっているとはいえ，喪失と救出 redemption についての彼の物語には，奇妙にも，屈したりしない何かが存在すると私は考える。ここにおいて，ヴィクター・バーギンの著作は特に示唆的なものである。彼は創造的かつ批判的に（とりわけ）ルフェーヴルとラカンに関する研究を行なっている。彼にとってもまた，空間は歴史を有するものであり，主体の構成と密接に結びついているものである。だが，彼は「視覚的＝幾何学的空間制度」,「植民地主義的・資本主義的近代性の一望監視装置的・道具的空間」がつねに逸脱によって裂け目を入れられ疑義をもたれるものであることを示して見せる。ホミ・バーバに同調しながら，バーギンは抽象空間の押し付けは，つねに<両義的 ambivalent> なものであり，――二項対立の増殖に関する固定的分析であるよりもむしろ――（狡猾な部分性の？）これらの妨害のモメントのなかで，バーバ自身が「第三空間」と呼ぶもの，すなわち，あわい inbetweenness の空間を垣間見ることを可能にすると，うまい具合に示唆する。バーギンは空間編成の上置は，かつてあったものを決して消去することは無いが，近代の空間性は「多孔質」であり，これらの孔目を通じて，過去が現在に噴出するのだと論じる。これらの妨害と置換は，バーギンがわれわれすべての者の中に潜在する空間のイメージと見なすものを――不完全にまた束の間――明らかにする。すなわち「主体が自身を溶解できる空間」であり，同時に「至福の源であり恐怖の源でもある」ような空間を[84]。

謝辞

本稿の最初のバージョンは，George Benko & Ulf Strohmayer (eds), *Geography, History and Social Sciences* (Dordrecht, Kluwer, 1995) に収められたものであり，その改定版が，編集者の招待によってここに出版された本稿である。私は普段以上に友人たちの批評や助言を当てにした。トレヴァー・バーンズ，アリソン・ブラント，ノエル・カストリー，マイク・クラング，ハイディ・ナスト，クリス・ファイロ，ジェラルディン・プラット，ローズ・マリー・サン・ジュアン，マット・スパーク，ブルース・ウィレムズ＝ブラウンの助力に喜んで謝意を表したい。とりわけスティーヴ・パイルには恩義を感じている。素晴らしく建設的な仕方で本論の原稿にコメントを寄せてくれたし，彼のラカン研究上の見識を私に惜しげもなく提供してくれたからである。

注

1) 私はルフェーヴルの省察を Henri Lefebvre, Él*ements de rhythmanalysyse: introduction à la connaissance des rhythms* (Paris, Syllepse)pp.41-53　所収の ‘Vu de la fenêtre’（翻訳：‘Seeing from the window, *Writings on cities* (Oxford and Cambridge MA, Blackwell, 1995), pp.219-27 から引用している。この論文は，1980 年代初頭に書かれ死後出版されたものである。リオタールの *Les immatériaux* の詳細について，私は John Rajchman の ‘The postmodern museum’,〔オリジナルはイラスト入りで *Art in America*, October 1985 に公表された〕pp.110-17, 171 およびその再版である *Philosophical events if the 80s* (New York, Columbia Universuty Press, 1992)pp.105-17 所収論文，また Paul Crowther の ‘The postmodern sublime’ (Andrew Benjamin(ed.), *Judging Lyotard* (London, Routledge, 1994) 所収 pp.192-205）から引用した。

2) Henri Lefbvre, La production de l’espace (Paris, Anthropos, 1974)。Donald Nicholson-Smith による英語への翻訳は *The production of space* (Oxford, and Cambridge, Mass., Blackwell, 1991)。〔訳者注：翻訳においては（斉藤日出治訳）『空間の生産』青木書店，2000 年，を随時参考にした。〕

3) Jürgen Habermas, *The theory of communicative action, vol.2, The critique of functionalist reason* (Cambridge, Polity Press, 1987) を参照のこと。本書の初版は 1982 年にドイツ語で出された。〔邦訳（丸山高司訳）『コミュニュケーション行為の理論　第２巻：機能主義的理性批判』未来社，1987 年〕。

4) 討論全体については，拙著 *Geographical imaginations*, (Oxford, and Cambridge, Mass., Blacwell, 1994) 所収論文 ’Modernity and the production of space’, pp.348-416 を参照のこと。

5) Karl Popper, The logics of scientific discovery (London, Hutchinson, 1959)。本書の初版は 1934-35 年，ドイツ，〔邦訳：（大内義一・森博訳）『科学的発見の論理』上 ,・下，恒星社厚生閣 , 1971，1972 年〕, 。

6) Margaret Cohen, *Profane Illumination: Walter Benjamin and the Paris of surrealist revolution* (Berkeley, University of California Press, 1993)。我々自身の時代により近いものについて，ヴァンサン・デコンブ Vincent Descombes は，史的唯物論が「欲望の射出と＜快楽＞によって」新しい命を吹き込まれると考えるような，ポスト 68 年のフランス批判的思想における再定位を示唆している。彼はヘルベルト・マルクーゼと，ゆえに間接的にではあるが，フランクフルト学派の批判理論の（見かけ上の passing）重要性を指摘してはいるが，むしろジル・ドゥルーズとジャン・フランソワ・リオタールの果たした貢献に対してより一層注目している。Vincent Descombes, *Modern French Philosophy* (Cambridge, Cambridge University Press, 1980), pp.171-86 参照〔邦訳（高橋允昭訳）『知の最前線：現代フランスの哲学』TBS ブリタニカ，1983 年〕。

7) Mark Poster, *Existential Marxism in post-war France: from Sartre to Althusser*, (Princeton, Princeton University Press, 1975), p.260.

8) Helena Lewis, *The politics of surrealism*, (New York, Paragon, 1988),p.x. フロイトの「発見」に対する自身の反応ははっきりしない。「シュルレアリスムが何であるかを私自身理解できないし，それが何を求めているのかも分からない」と彼はブルトンに書き送っている。またコーヘンは「思わせぶりにマルクス主義理論を旋回するようなフロイトによる声明」へのブルトンの関心にフロイトが戸惑っているのだと述べている。Cohen, *Profane Illumination,* (1993)pp.57-61 参照。さらなる議論については，Elizabeth Roudinesco, ‘Surrealism in the service of psychoanalysis’, in *Jaques Lacan & Co. A history of psychoanalysis in France, 1925-1985*, (Chicago, University of Chicago Press, 1990), pp.3-34 を参照のこと。

9) Lefebvre, in *Production*, (1974), p.18.

10) シュルレアリスムとラカン自身の研究との（複雑な）結びつきの詳細については，Cohen, *Profane Illumination*,(1993),pp.147-53 および David Macey, ‘Baltimore in the early morning’, *Lacan in context*, (London, Verso, 1988)pp.44-74 を参照されたい。Ma メイシーの論文のタイトルは，ラカンの「シュルレアリスト」的な無意識についてのイメージを「早朝のボルチモア」と彼が考えるものに由来している。

11) ソジャは，「ヘーゲルとヘーゲル主義が強力な空間主義的存在論を広めた」のだが，それは結果的にマルク

スがヘーゲルを「反転させた」時に失われたのだと論じる。「フランスにおけるマルクス主義の初期の拡張期は，しかしながら広範囲にわたるヘーゲル主義のリヴァイヴァル，またそれほど削除修正されていない社会生活の空間性への感受性をともなう再認証と同時期にあたっていた」。Edward Soja, *Postmodern geographies: the assertion of space in critical social theory,* (London,Verso,1989),pp.46-7,86〔邦訳（加藤政洋，西部均，水内俊雄，長尾謙吉，大城直樹）『ポストモダン地理学』青土社，2003 年〕参照。シュルレアリスム，ヘーゲル，ルフェーヴル，この三者間の関係認知をめぐるより徹底した議論については――空間性について何も語るものではないが――，Martin Jay, 'Henri Lefebvre, the surrealists and the reception of Hegelian Marxism in France', in his *Marxism and totality: adventures of a concept from Lukacs to Habermas*, (Cambridge, Polity Press, 1984)pp.276-99〔邦訳（荒川 幾男訳）『マルクス主義と全体性―ルカーチからハーバーマスへの概念の冒険』国文社，1993 年〕を参照のこと。

12) Macey, *Lacan*(1998)p.96。フランスにおけるヘーゲル主義のリヴァイヴァルに果たしたコジェーヴの役割に関する議論については，Judith Butler, *Subjects of desire: Hegelian reflections in twentieth-century France* (New York, Columbia University Press, 1987) 及び Michael Roth, *Knowing and history: appropriations of Hegel in twentieth-century France*, (Ithaca, Cornell University Press, 1988) を参照のこと。

13) ラカンとアルチュセールの関係については，マーティン・ジェイをとりわけ参照した。'Lacan, Althusser and the specular subject of ideology' in Martin Jay, *Downcast eyes, the denigration of vision in twentieth-century French thought,* (Berkeley, University of California Press, 1993),pp.329-80 を見よ。また Michele Barrett, *The politics of truth: from Marx to Foucault*, (Cambridge, Polity Press, 1991), pp.96-110 も参照のこと。ルフェーヴルとアルチュセールの関係については，Michael Kelly, *Modern French Marxism*, (Oxford, Basil Blackwell, 1982) 及び Gregory, 'Modernity', (1994) pp.355-7 を見よ。

14) 概説として，Anthony Elliott, 'Psychoanalysis, ideology and modern societies: post-Lacanian social theory', in his *Social theory and psychoanalysis in transition: self and society from Freud to Kristeva,* (Oxford, and Cambridge, Mass., Blackwell, 1992) pp.162-200, 特に pp.164-77 を参照のこと。

15) ルフェーヴルは 1943 年に出版されたサルトルの『存在と無』を徹底的に敵対的な表現で却下している。だが，1960 年の『弁証法的理性批判』第 1 部の出版は，サルトルのマルクス主義受容とルフェーヴルによる（いまだ批判的な）サルトルの容認の両方を跡付けるものである。

16) 事実，ルフェーヴルが苦手とするもう一人の人物フーコーが，高等師範学校（ENS）がラカンのセミナーを校内で続けることを拒否した後，ヴァンセンヌに招いたのであった。フランス哲学と 1968 年 5 月の出来事の結びつきに関するより一般的な（とはいえ身贔屓的でないものがめったにない）議論については，Luc Ferry and Alain Renaut, *French philosophy of the sixties: an essay on anti-humanism*, (Amherst, University of Massachusetts Press, 1990) 参照。本書は 1985 年にフランス語で初版が出された。ルフェーヴルはこれら出来事についての彼自身の説明を *The explosion: Marxism and the French evolution*, (New York, Monthly Review Press, 1969) のなかで行っている。本書の初版はフランス語で 1968 年に出された。

17) Malcom Bowie, *Lacan* (London, Fontana, 1991), pp.98-9。ラカンのトポロジーの事例については，Jeanne Granon-Lafont, *La topologie ordinaire de Jacques Lacan*, (Paris, Point hors Ligne, 1985) および Alexandre Leupin, 'Voids and knots in knowledge and truth', in Alexandre Leupin(ed.), *Lacan and the human sciences*, (Lincoln, University of Nebraska Press, 1991) pp.1-23 参照。

18) Elizabeth Grosz, *Jaques Lacan: a feminist introduction*, (London, Routledge, 1990) pp.33-4。Bowie, *Lacan,* (1991) p.99。私がこの解釈パズルを解き明かすことができたのは，スティーヴ・パイルのおかげである。

19) Anthony Elliott, 'The language of desire: Lacan and the specular structure of the self' in his *Social theory and psychoanalysis* (1992) pp.123-61。引用は p.125 から。この二つの概念が異なる時代に展開されたことを付け加えねばなるまい。ラカンは当初その想像界に関する考えを 1936 年に公にした。とはいえ印刷（そして改訂）版は 1949 年になるまで出されなかった。象徴界は，1950 年代から 60 年代にかけて独創的な形で明らかにされることとなった。

20) Bowie, *Lacan*, (1991) p.95。

21) Bowie, *Lacan*, (1991) p.23。仮に称賛すること celebration がやり方に適っているならば，「認識論的な空虚」を認識できるチンパンジー以上に価値ある主体を考えることは困難であろう。

22) Jameson, 'Imaginary and Symbolic in Lacan', pp.354-5〔邦訳（鈴木聡訳）『のちに生まれる者へ』紀伊国屋書店，1993 年〕。

23) ロジェ・カイヨワの原著は 1935 年に *Minotaure* に掲載された。のちに 'Mimicry and legendary psychasthenia', *October* 31, (1984) pp.17-32 として翻訳され再版された。引用は p.30 から。私の議論はまたジェイにも負っている。'Specular subject of ideology', pp.342-3。

24) Grosz, *Jacques Lacan*, (1990), p.38。こうした考察はグロスをして視覚中心主義にラカンを連座させるものである。だが，彼女の議論は視覚がジェンダー化される複雑な仕方を――ラカンの男性中心主義を彼女は非難しているのではあるが――無視しているし，視覚中心主義に対

するラカンの＜批判*critique*＞を排除してしまっている。Jay, 'The specular subject of ideology', pp.353-70 を見よ。

25) Peter Dews, 'Jacque 3acan: a philosophical rethinking of Freud', in his *Logics of disintegration: post-structurist thought and the claims of critical theory*, (London,Verso, 1987) pp.45-86。引用は p.55 より。Elliott, 'Language of desire', (1992) p.128。

26) Steve Pile, 'Human agency and human geography revisited: a critique of "new models" of the self', *Transaction of the Institute of British Geographers*, 18, (1993) pp.122-39。引用は p.135 より。

27) Bowie, *Lacan* (1991),p.200。ボウイはラカンが理論の言語を「エロティックにする」とほのめかす。また興味深いことにイーグルトンは同じような指摘をジェイムソンについてしている。

> 言説は欲望に復しなければならない。だがそれがその欲望の歴史的実感を没収する程度にではない。ジェイムソンのスタイルは　それらを媒介しようと奮闘するものであるにせよ，こうした矛盾を図らずも見せてしまう実践なのである。

'Fredric Jameson and the politics of style', in his *Against the grain: essays 1975-1985*, (London, Verso, 1986) p.69 参照。

28) Bowie, *Lacan*, (1991) p.76。

29) Bowie, *Lacan*, (1991) p.70-1。

30) これらの関係についての私の理解は Jane Gallop, 'Metaphor and metonymy' in her *Reading Lacan*, (Ithaca, Cornell University Press, 1985) pp.114-32〔邦訳（富山太佳夫ほか訳）『ラカンを読む』岩波書店，1990 年〕に負っている。ラカンにおける隠喩と換喩の共存的かつ対立的な読解を提示すること，およびこの二つの語の間の対立とそれらのコノテーション（暗示的意味）が決してストレートなものでも安定したものでもないことを示すことに，彼女は見事なまでに成功している。

31) Jay, 'The specular subject of ideology', p.352。また Grosz, *Jacques Lacan*,(1990), pp.101-5 も見よ。

32) これらの所見はハムレットに関するラカンのセミネールからのものである。Kaja Silverman, *The subject of semiotics*, (New York, Oxford University Press, 1983) p.183 に引用されている。ラカンが他の場所を観察するのだとすれば，結果的に「何ものも不在（欠落）absence の仮定された基盤を除いては存在しえないのである」。

33) とはいえ，この二つは決して結び付けられていないわけではない。Kaja Silverman, 'The Lacanian phallus' in *differences*,4, (1992) pp.84-115 参照。

34) Gallop, *Reading Lacan*,(1985), p.20。しかしながらこのことがラカンの男性中心主義を無罪放免にするわけではない。ギャロップは 'Reading phallus', pp.133-56 のなかで，建設的な批判的説明を行っている。また彼女の *The daughter's Seduction: feminism and psychoanalysis*, (Ithaca, Cornell University Press, 1982)〔邦訳（渡部桃子訳）『娘の誘惑―フェミニズムと精神分析―』勁草書房，2000 年〕も参照のこと。さらなる議論として Bowie, 'The meaning of the phallus' in *Lacan* (1991), pp.122-157 および Jane Flax, *Thinking fragments: psychoanalysis, feminism and postmodernism in the contemporary West*, (Berkeley, University of California Press, 1990) pp.97-107 を参照のこと。

35) Gallop, *Reading Lacan*,(1985), pp.19-21, 131。

36) Dews, 'Jacque Lacan', (1987), pp.79-80。

37) この語は Jay, 'The specular subject', p.359 による。ジェイはラカンが申し出た眼とまなざしの間の差異をめぐって重要な議論を続けている。ラカンの著しく想像的 imaginative な奪用 appropriation については，Kaja Silverman, 'Fassbinder and Lacan: a reconsideration of the gaze, look and image', in her *Male subjectivity at the margins*, (New York, Routledge, 1992) pp.125-156 参照。

38) Lefebvre, *Production*, (1974), pp.35-5。

39) Ibid. p.36。ルフェーヴルは結果的に，まさしくこうした語によって「空間の精神分析」について語っている (p.99)。

40) Ibid. p.36。『空間の生産』における強調は極めて重要である。というのも，ルフェーヴルが――彼はしてはいないが――禁止の実在性を否定しているからではなく，空間フェティシズムの名で非難されうる「空間それ自体」への先入見から彼を遠ざけるからである：ibid.p.90。またこのことは,「単に《否》の空間というだけでなく,（しかし）また身体の空間として，そしてそれ故《是》の空間として，生の肯定の空間として」，社会空間を取り扱うことを可能にしているのである：ibid, p.201。

41) Ibid. pp.117, 174。Claude Lévi-Strauss, *Les structures élémentaires de la parenté* (Paris, Presses Universitaires de France)〔邦訳（馬淵東一・田島節夫監訳）『親族の基本構造』上・下，番町書房 1977・78 年〕, 英訳 *The elementary structure of kinship*, (Boston, Mass., Beacon Press, 1969) を比較参照せよ。レヴィ＝ストロースの史的唯物論との関係については，つねに異論が付きまとうところであり，思うにそれは，なぜルフェーヴルが「自然の領有」を通じてなぜ古典的マルクス主義に訴えるか, ということに関わっている。ルフェーヴルはのちにレヴィ＝ストロースと直接対立する。彼の構造人類学は抽象化の別の戦略であり，そのなかにあっては，空間は，その内容物とはまったく無関係の単なる「等級区分 classification の手段，事物の組織的命名（法）nomenclature，分類法 taxonomy」となってしまう，と。ルフェーヴルはまた，そして結果的に，セクシャリティやエロティシズム，あるいは欲望を議論することなしに親族について論ずるレヴィ＝ストロースの決着 determination にひどく驚愕させられる：Lefebvre, *Production*, (1974), p.296。

42) Ibid. pp.110-11。

43) Ibid. p.251。抽象空間の類推的・宇宙論的空間と，歴史的空間の象徴空間の出現の区別に関して議論を尽くしたものとして，Gregory, 'Modernity', (1994), pp.382-92 参照。

44) Michel Foucault, *Les mots et les chose*, (Paris, Gallimard, 1966)〔邦訳（渡辺一民・佐々木明訳）『言葉と物』新潮社，1976 年〕, 英訳は *The order of things: an archaeology of the human sciences*, (London, Tavistock, 1970), p.22。フランス語の原著はラカンの『エクリ』の出版と関係がある。フーコーはラカンの講義を高等師範学校で聞いていた。精神分析は，彼が『言葉と物』の中で議論した「反＝科学」の一つである。ディディエ・エリボンは，「フーコーの考古学的企ての全体は実際，ラカンに基づいている」と主張するが，彼の別の伝記作家――デイヴィッド・メイシーやジェイムズ・ミラー――は，フーコーはラカンのプロジェクトにほとんど共感していないと強く主張する。もっとも，エリボンはフーコーのプロジェクトである『性の歴史』の第 1 巻『知の意思』の時期までには，彼が「ラカンに逆らって系譜学的探究へと旅立った」ことに同意している：Didier Eribon, *Michel Foucault*, (Cambridge, Mass; Harvard University Press, 1991) p.272〔邦訳（田村俶訳）『ミシェル・フーコー伝』新潮社，1991 年〕参照。本書のフランス語初版は 1989 年。ラカンに近しい協力者（義理の息子）は，フーコーの著作における精神分析の重要性についてポスト＝モダン的な議論を行っている。Jacques-Alain Miller, 'Michel Foucault and psychoanalysis', in Timothy Armstrong (trans.), *Michel Foucault: philosopher*, (London, Routledge, 1992) pp.58-63 参照。

45) Foucault, *Order of things* (1970), p.27（強調は筆者による）。

46) Ibid. pp.34-5, 38-9。ルフェーヴルは「世界なるものについての散文」についても語っているが，彼は「資本主義的空間の均質的マトリクス」を構築する＜建築物 *buildings*＞，また彼が空間性の象徴的次元を読む＜建築物 *buildings*＞を念頭に置いている。Lefebvre, *Production*, (1974), pp.227 参照。

47) Ibid.pp.118,132,143。ルフェーヴルのフーコーとの（ここやまた別の場での）距離は，それゆえ無視しえない。ルフェーヴルの興味を引いているのは，そういうわけで，言語＜としての＞空間ではなく，むしろ「空間＜と＞言語のいまのところ隠された関係」である（p.17。強調は筆者）。

48) J. G. Merquior, *From Prague to Paris: a critique of surrealist and post-structurist thought*, (London, Verso, 1986) p.155〔邦訳（財津 理・荻原真訳）『現代フランス思想とは何か―レヴィ＝ストロース、バルト、デリダへの批判的アプローチ』河出書房新社，2002 年〕。私は構造主義とポスト＝構造主義への反感ということでメルキオールとルフェーヴルを結び付ける。メルキオールは構造主義とポスト＝構造主義をつなぐ橋の主要な建築家としてラカンを扱っている (p.149)。

49) このフレーズはトリスタン・ツァラのものであり，鏡を参照している。Lefebvre, *Production*, (1974), p.184n。

50) Ibid. p. 184n。

51) Ibid. p.5。ルフェーヴルの非難は，アルチュセール，バルト，デリダ，フーコー，クリステヴァ，そしてラカンを含む。

52) Ibid. p.185n。

53) Ibid. p.186。

54) Ibid. pp.182-3, Jay, 'The specular subject of ideology', p.353-7。私はここで暗化 scotomization に関する複雑な議論を要約し単純化している。詳しくは Carolyn Dean, *The self and its pleasure: Bataille, Lacan and the history of the decentred subject* (Ithaca, Cornell University Press, 1992) を参照されたい。

55) Ibid. p.201。

56) Lefebvre, *Production*, (1974), pp.185（強調筆者）, 311, 313-4。

57) Ibid. p.286。

58) Ibid. p.286。「スペクタクル化」について話す中でルフェーヴルは，彼とシチュアシオニスト・アンテルナシオナルとの（一度だけだが緊密な）協力と，とりわけギー・ドゥボールの *La société du spectacle* (Paris, Edition Buchet-Chastel, 1967) 〔邦訳（木下 誠訳）『スペクタクルの社会』平凡社，1993 年〕に負っていることを認めている。本書は *The society of the spectacle*, (Detroit, Black and Red, 1983) として英訳出版された。ルフェーヴルの主張と示唆的な仕方で交錯するスペクタクルなるものの時期区分に関する想像力に富んだ解説としては，Jonathan Crary, 'spectacle, attention, counter-memory', *October* 50, (1989) pp. 99-107 を参照のこと。

59) Lefebvre, *Production*, (1974), p.98。ルフェーヴルから直接に手がかりを得た，明確なに空間的隠喩に関する有益な解説として，Neil Smith and Cindi Katz, 'Grounding metaphor: towards a spatialized politics' in Michael Keith and Steve Pile, *Place and the politics of identity*, (London, Routledge, 1993), pp. 67-83 を参照されたい。彼らの議論の中心は，ルフェーヴルの次の言葉にある。「空間的隠喩は，それらが空間を問題ないものと前提している限り問題を有する」。

60) Lefebvre, *Production*, (1974), p.139。

61) Ibid. pp.225-7, 248。Andrew Merrifield, 'Lefebvre, Anti-Logos and Nietze: an alternative reading of *The production of space*', Antipode, 27,(1995) pp.294-303。もまた参照。

62) Lefebvre, *Production*, (1974), p.97。

63) Ibid. pp.27-30, 39; Soja, *Postmodern geographies*, (1989), pp.122-6。

64) Lefebvre, *Production*, (1974), p.133-5。私は Anderson, *Tracks*, pp.40-1 から「言語の法外性 exorbitation」というフレーズを拝借した。特にここではふさわしいようである。ルフェーヴルは精神分析をこれら二つのポジションの間の（不誠実な）仲介業者と表象しているとはいえ，

彼は――アンダーソンのように――ラカンを第一のポジションに次者と同定し，第二のポジションからもラカンが言わねばならなかったことにはほとんど注意を向けてはいない。

65) Lefebvre, *Production*, (1974), p.203。

66) Ibid. pp.203, 391-2。

67) Ibid. pp.282, 289。Mlichel Foucault, *Discipline and panish: the birth of the prison* (London, Allen Lane, 1977)〔邦訳（田村 俶訳）『監獄の誕生』新潮社, 1977 年〕と比較参照のこと。フランス語原著の出版は 1975 年。

68) Lefebvre, *Production*, (1974), p.97。

69) Ibid. p.287。

70) Ibid. p.287。

71) Ibid. pp.262, 408。

72) Ibid. p.310。

73) Gillian Rose, *Feminism and geography,* (Cambridge, Polity Press, 1993) p.310〔邦訳：ジリアン・ローズ（吉田容子ほか訳）『フェミニズムと地理学』地人書房, 2001 年〕。彼女は結果的にこれらの考察を，空間の透明性と男性中心主義のなかに刻み込まれた主体の透明性に関する一連の聡明な省察のなかで展開させた。特に彼女の 'Distance, surface, elsewhere: a feminist critique of the space of phallocentric self/knowledge', *Environment and Planning D: Society and Space*, 13, ,(1995) pp.761-81 を参照のこと。しかしながら私は，これらの企図が一致していると言いたいわけではないし，こうした親和性がルフェーヴルの企図をフェミニストの批評から護っていると言いたいわけでもない。

74) Lefebvre, *Production*, (1974), p.310。別の場所でルフェーヴルは「大いなる去勢」について言及している（p.410）。これはおそらくフーコーの「大いなる監禁」論のしゃれだろう。

75) Henri Lefebvre, *The survival of capitalism,* (London, Allison and Busby, 1974) p.31。原著は *La surview du capitalism*, (Paris, Editions Anthropos, 1973) として出版された。このことはおそらくラカンに関しては正しいであろう。また精神分析理論の多くには，疑うまでもなく普遍化したがる傾向が見て取れる。だが，こうした主張がそれ自体誤解を招く恐れのある普遍的特性となるというわけではない。例えばクリステヴァは，「記号のエコノミー signifying economy」が，＜伝記的＞主体を通して稼働し，＜歴史的＞主体として彼／彼女に反応することを非常に明白に説明している。ジョアン・コプチェクは近年，歴史性を否定しないような，説得力のあるラカン派の歴史主義批判を提供した。Joan Copjec, *Read my desire: Lacan against the historicist*, (Cambridge, Mass., MIT Press, 1994)〔邦訳（梶理和子ほか訳）『私の欲望を読みなさい：ラカン理論によるフーコー批判』岩波書店，1998 年〕。

76) Lefebvre, *Production*, (1974), p.196。

77) Ibid. p.204。

78) David Harvey, *The condition of postmodernity: an enquiry into the origins of cultural change*, (Oxford, and Cambridge, Mass., Blackwell, 1989), pp.53-4〔邦訳（吉原直樹監訳）『ポストモダニティの条件』青木書店，1999 年〕。Meaghan Morris, 'The man in the mirror: David Harvey's "Condition" of Postmodernity', *Theory, culture and society*, 9 (1992), pp.253-79 を比較参照のこと。ルフェーヴルのプロジェクトとハーヴェイの歴史＝地理的唯物論との間の，別の連続性や対称性に関する詳細な議論については，Gregory, 'Modernity', (1994) を参照されたい。

79) Ibid. p.391。この一般的レベルにあっても，反省 reflection と思索 speculation の領野の中で，より詳細な反＝歴史学を提示することは可能である。例えば 20 世紀フランス哲学の眼球中心主義 ocularcentrism に対する根気強い批判に関するマーティン・ジェイの再構築に，私はかねてから依拠しているのであるが，ロザリンド・クラウスによる美術史の素晴らしい再構築と，抽象化された眼の権力のなかにあって，かつそれに対抗するかたちで視覚の身体性 corporeality を刻印する彼女の反＝モダニズムの喚起についても注意を向けたいと思う。

80) John Rajchman, *Michel Foucault: the freedom of philosophy,* (New York, Columbia University Press, 1985) p.58〔邦訳（田村俶訳）：ジョン・ライクマン（訳）『ミシェル・フーコー：権力と自由』岩波書店，1987 年〕。

81) Lefebvre, *Production*, (1974), p.229.

82) Ibid.pp.205, 209, Lefebvre, *Elements*,(1992) も見よ。

83) Michael Trebitsch, 'Preface' to Henri Lefebvre, *Critique of everyday life*, vol.1: Introduction, (London, Verso, 1991) p.xxiv; 原著は *Critique de la vie quotidienne*,(Paris, Grasset, 1974)。「日常生活の植民地化」およびその「失われた充溢性」の実践的回復に関するルフェーヴルの説明をめぐる議論については，Gregory, *Imaginations* を見よ。

84) Victor Burgin, 'The city in pieces', *New formations* 20, (1993) pp.33-45; 前出 'Geometry and abjection', in James Donald, (ed.), *Psychoanalysis and cultural theory: thresholds* (London; Macmillan/ICA, 1991) pp. 11-26; Homi Bhabha and Victor Burgin, 'visualizing theory' in Lucien Taylor (ed.) *Visualizing theory* (New York and London; Routledge, 1994) pp.454-63. 仮にこれが，まったくのポストモダン的な崇高であるなら，ルフェーヴルとリオタールが，異なった仕方で，根底的に異なった立場から，一人はボーブールの内側から，一人は外側から，喚起した空間が，それなのではないだろうか？

訳者注

著者の謝辞にあるように，本稿は改訂版（1999 年）であり，その初版（1995 年）とは，冒頭部と結部にいささかの違いがみられる。初版のタイトルは「ルフェーヴル，ラカン，空間の生産」である。異なっているところを見れば，まず冒頭部に見られる印象的なルフェーヴルとリオタールの対比およびポスト構造主義の紹介はなく，その代り，ペリー・アンダーソンの *Considerations on Western Marxism* を引きながら，アングロ圏におけるルフェーヴル受容の状況について語っている。アンダーソンによれば，ルフェーヴルは，「パリに亡命中のベンヤミンが読み取ったように，1930 年代の終わりの段階で国際的に孤立した者であり，フランス国内においても一人ぼっち」な，連れのいない哲学者であって，20 世紀末にあって，左翼の多くに無視されてきた諸主題に関して落ち着いたオリジナルな研究を生産し続ける「最高齢の生存者」であったと。だが，グレゴリーは，フレドリック・ジェイムソンのように，マルクス主義への批判の厳しいこの時勢においてこそ，政治（学）の基本カテゴリーとして，また弁証法それ自体の基本カテゴリーとして，ルフェーヴルの空間概念をこそ，その開拓者的な含意のすべてにおいて理解すべきであると例外的に繰り返し称賛する者もあると述べる。過去なるものと対峙することを新たな仕方において可能にし，そのそれほど明白であるとは言えない空間的構造のテンプレートの秘密を読み取る，新しい空間的想像力をルフェーヴルは提唱したのだと。ラカンとの関係で言えば，ジェイムソンが意味作用の連鎖におけるポストモダン的な脱臼を調査し，身体と空間の今日的分裂を明らかにし，政治文化の本来的に空間的なモデルを提供しうる「認知地図」をめぐる美学の必要性を示唆する際に，ラカンがますます重要な位置を占めてきていることにも言及している。

また，グレゴリーは 1994 年に出版した自著 *Geographical Imaginations* に掲載されている「日常生活の植民地化」（別稿では「権力の眼」と題されている）の図と「空間の脱肉体化」の図を初版には掲載しているが，改訂版では省略している。前者は，空間の表象，表象の空間，空間的実践という三つの概念が入り組んだルフェーヴルの「空間の生産」論を，ハーバーマスの「日常生活の植民地化」概念と接合させて図解するものである。後者は，空間の表象と生産様式と都市形態の三つの項を立て，空間の脱＝身体化と社会の都市化という二つの指標とリンクさせて，相互の関係性を図化したものである。改訂版で省略されているのは，おそらく，詳しくは *Geographical Imaginations* を参照せよ，ということであろう。実際，初版にあっても，このことについて詳しく論じられているわけではない。第 2 節「身体と空間の歴史」の第 2 パラグラフから，最終節の最後のパラグラフの手前までは，同一文書である。正確には最後から 2 番目のパラグラフの最後の文にある extremely troubling（きわめて厄介な）は初版では awkward（扱いにくい）であり，問題含みのものであることを強調している。初版には改訂版の最終パラグラフはなく，awkward の文章の後に続けて，「彼の『奪還の考古学』がフーコーの考古学的試みとは異なること，またラカンのそれとも異なっていることもまた明白である。それはまさにルフェーヴル独自のものなのである」と記して終了している。

このグレゴリーの所論と，スティーヴ・パイルら，フロイトの精神分析に言及する地理学者の言説については別稿にて考察するつもりである。最後に，精神分析関係の専門用語や概念に対する訳者の理解の未熟さゆえ，思わぬ誤訳も多々あるものと思われるので，読者においては原文に当たって読まれることをお勧めする。